

1. 原発性か転移性かの診断が困難であったHCG産生性肺腫瘍の1例(第144回 日本肺癌学会関東支部会, 関東支部, 支部活動)

著者	酒井 光昭, 石川 成美, 伊藤 博道, 小澤 雄一郎, 山本 達生, 鬼塚 正孝, 榊原 謙, 飯島 達生, 野口 雅之
雑誌名	肺癌
巻	46
号	2
ページ	171
発行年	2006-04-20
権利	日本肺癌学会
URL	http://hdl.handle.net/2241/00135028

支部活動

関東支部

□第144回

日本肺癌学会関東支部会

平成17年12月17日(土)

京王プラザホテル(新宿)南館4階

「錦」・本館4階「花C」

当番幹事 雨宮隆太

(茨城県立中央病院・茨城県地域がんセンター外科, 杏林大学医学部外科学教室)

1. 原発性か転移性かの診断が困難であったHCG産生性肺腫瘍の1例
筑波大学大学院人間総合科学研究科臨床医学系外科

酒井光昭, 石川成美, 伊藤博道

小澤雄一郎, 山本達生, 鬼塚正孝

榊原 謙

同 基礎医学系病理

飯島達生, 野口雅之

32歳女性。流産で子宮内膜掻爬術施行後に高HCG血症が持続し、再掻爬と婦人科画像精査を行ったが腹腔内病変なく経過観察された。しかしHCGが漸次増加するため胸部CT施行。右肺S¹⁰に直径16mmで空洞を伴う腫瘍を認めた。胸腔鏡下肺部分切除術を施行したところHCGは基準値へ戻った。病理診断はcarcinoma with trophoblastic differentiationで、転移性絨毛癌が疑われたがHCG産生性原発性肺腫瘍も否定できず、二期的に右肺下葉切除術(ND2a)を行った。HCG産生性肺腫瘍に関して考察する。